
復讐未遂

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐未遂

【Nコード】

N1156R

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

母親の誕生日ケーキを作ろうと近状のスーパーに買い物に行った。いつもスーパーの前に供えられている花が気になっていた。そしてその日、初めて供えている人を見て……。

私はカーキ色の長袖とデニムのロングスカートにくるぶし丈のブーツ、そんな服装で買い物に行った。近所のスーパーまで歩いて、今日の母親の誕生日ケーキの材料、イチゴが安ければイチゴショート、高ければチョコケーキを作ろうとしていた。

母親は私がケーキを作ろうとしていることは知らない。家族の誰にも知らせていない。サプライズだ。きつと会社帰りの母親は机の真ん中にでんと置いてあるケーキに驚くだろう。私はその場面を想像した。ろうそくは立てない。ただケーキの真ん中にはチョコプレートを飾ろう。『おかあさん たんじょうび おめでとっ』ホワイトチョコペンでお祝いの言葉を書こう。母はどんな顔をするだろうか。

近所のスーパーにはよく行く。品数が豊富で大体の食品は揃っていたし、デパートなんかより良心的な値段がお気に入りだった。それに家から近い。徒歩で10分ほどの距離にある。

家から出てすぐ、右にずっと歩いて、二つ目の信号を左に曲がる。ほらもうスーパーの看板が見えた。

私はそこでいつものようにスーパーの前、大きな車道の向こう側に花が置かれているのを見た。私が小さいときから置かれている花瓶に活けられた花束。初めて見たのはいつだったか覚えていないが、まだ私が父に手を引かれて歩いていた子供のときだったと思う。どんな事故だったのか。誰が死んだのか。私は知らない。母親はスーパーの向かいに花束が供えられているのを知っているのだろうか。きつと仕事帰りの夜中しか買い物に行かない母は知らない。忘れ去られた花。今日は白い花だった。見るたびに換えられているその日その日で違った花。私は花に詳しくないが、シャンとして元気な花を見ると、きつと毎日取り替えられているのだろうと思う。

そう。私はその花を見るたび不思議に思っただった。誰かがここで死んだ。誰かが花を供えている。きつと涙を流していることだろう。しかし私はその誰かを知らない。見たこともない。

イチゴは高かった。予算を150円オーバーしていた。だからチョコケーキを作ることになった。ケーキのスポンジはモントンと決めている。モントンの生地をつのが立つほどかき混ぜるのは大変な作業だが、私はモントンの生地が一番美味しいと思っっているのだからしょうがない。モントンのココア色の生地と板チョコ三枚、生クリームと適当に果物の缶詰を買った。これでケーキの材料は完璧だった。ホワイトチョコペンとチョコプレートも買い忘れなかった。

店を出るとスーパーの前の車道の向こう側の歩道で、花を取り替えている夫婦を、私は見た。

だから私は驚いたのだ。その「だから」の理由は自分でもはつきりとは分からなかったが（今でもそうだが）私は「ああ、だから……だ！！」と何故か自分で納得した。

夫婦はそんなに悲しそうな顔をしていなかったように見える。それともそうなのかもしれない。何せ私が5歳のころには花はその場所に供えられていたのだから。少なくとも誰かが死んだのは10年以上前のことだろう。悲しみだって薄れる。

薄れるのか？ その夫婦は毎日花を供えていたんだぞ。去って行く夫婦の後ろ姿を呆然と見たまま、私はその場に立ち尽くした。買ったモモ缶やミカン缶やパイナップル缶がずしりと右手に重たかった。

少しだけ、感動している自分がいた。すごいな、と。誰かがいなくなつて、そのあと何年も、生き残った人に影響を与えている。私が死んでもこうはならないだろう。

それは「衝撃」だったのだと思う。家に帰って、生クリームを冷蔵庫に閉まって、モントンの生地をかき混ぜなきゃ、と思うところまでは順調だった。しかしその衝撃の余韻が波のように襲ってきた。花束を取り替える夫婦のしゃがんだ姿。二人の顔は穏やかだった。笑いもせず、泣きもせず、二人は黙って花を換えた。白から、カラフルな花束へ。あれはコスモスだったのだろうか。花に詳しくない私には遠目からでは判断出来なかった。二人は今までいくつの花をあの花瓶に活けたのだろう。

モントンをほっぱり出して、私はリビングのソファに寝転がった。横目で時間を確認する。母親が帰って来るまであと4時間ある。早くケーキを作らないと、時間までに完璧に完成しないかもしれない。頭の中でケーキ作りの工程を思い浮かべる。さあやらなくては。

ケーキは順調に完成に向っていた。モントンと生クリームをひたすらかき混ぜる作業に腕はくたびれたが、そのおかげで満足できるケーキになりそうだった。焼きあがった生地を上下半分に切り、その間にチョコレートホイップと缶詰のフルーツを敷き詰める。周りはチョコホイップでデコレートし、ケーキの真ん中にはあのチョコプレートこそつと乗せた。ケーキは完成。少し生クリームが固かったかもしれないが、ほとんど完璧に近い出来に仕上がった。

出来上がったケーキをリビングの低いテーブルに置く。あと30分で母親は帰ってくるだろう。

母親は机に置いたケーキを見てどんな反応をするだろう。初めて娘が作った自分の誕生日ケーキ。そしてその横に死んでいる私。大嫌いな母親の驚く顔を想像した。母親は泣いてくれるのだろうか。それとも困ったように眉を寄せるだけ？ 私には分からなかった。

チョコを刻んだときについた甘い匂いの包丁を、私は私の首筋に当てた。母親のお気に入りソファ。きつと血だらけになる。なればいい。開いた窓から涼しい夜の風が吹いて、カーテンがバサバサとはためいた。甘い包丁は暖かくも冷たくもなかった。それが何だか不思議だった。

ふいにあの夫婦の姿を思い出した。花束を取り替えるしゃがんだ二人。あんまり悲しそうな顔をしていなかった。笑ってもなく、泣いてもなく、怒ってるふうでもなく。あれは、寂しそうな顔だった。

包丁を首に押し当てた。これで完璧なんだ。これで完璧なんだ。逸る私の気持ちと逆に、暖かくも冷たくもない刃は、本当に死ねるのかと思うほど、穏やかだった。それは確かに、手を引くだけで命をひとつ消すことが出来た。しかし私が力を入れなければ、刃を引かなければ、それはただの物体であった。

夜の風がまた部屋に吹き込んできた。どこかで救急車のサイレンが聞こえる。もうすぐ母親が帰ってくる。気がつけば朝から何も食べていないことを思い出した。胃が痛いくらいにお腹が減って、もしかしたら死ぬかもしれないと思った。

グルグル鳴るお腹にフルーツの残りを放り込んだ。それから甘い匂いの包丁を私はゴシゴシとたわしで擦った。戸棚に閉まった途端、母親が帰って来た。

「ハッピーバースデー。ほら、はやくケーキ食べよう」

母親は目を丸くしてから「甘い匂いがすると思った」と言っ、笑った。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

えっと、この話は私に実際にあったことと、なかったことを混ぜたものです。

しかも昔書いたお話と、今思いついたお話をも、混ぜています。ですからいつも以上になにが言いたいのか、はっきりしない内容となっております。

伝えたかったことは、死者が生きている人にどれほど影響しているか。

そんな感じです。

ご感想、ご指摘、ご意見、宜しかったらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1156r/>

復讐未遂

2011年2月26日15時25分発行